

W-3

「～かのように」語ることばたち：伝え方の意味論に向けて

メンバーと構成

企画：松田俊介 (東京大学大学院) 司会：西村義樹 (東京大学)

コメンテーター：西村義樹、野村益寛 (北海道大学)

発表者：野中大輔、松田俊介、長谷川明香、田中太一

- [1] 趣旨説明：司会者による趣旨説明
- [2] 研究発表：発表者による研究発表
 - (i) 仮想変化表現の射程 (野中大輔)
 - (ii) ギャップを埋めるデフォルト表現 (松田俊介)
 - (iii) 非典型的な語彙的使役構文における「かのように」性 (長谷川明香)
 - (iv) 「かのように」の見えづらさから見えてくるもの (田中太一)
- [3] コメント：コメンテーターによるコメント
- [4] 全体討論：会場からの質疑応答・総括

企画趣旨

言葉が字義通りの意味を表すことは実はそれほど多くはない。現実の事柄を語る日常の言語表現にも「まるで～かのように」語る方策は遍在している。例えば、丸い形状の部屋を指して「この部屋は丸くなっている」と言うことがある。この表現は部屋を丸くなったかのように捉えた結果であると分析される (Matsumoto 1996)。この一見もつともな説明には、大きな問題が潜んでいる。それは「かのように」捉える過程の働きである。話し手も聞き手も、明らかに実際に部屋が丸く変化する過程が存在しないことを理解したうえで、コミュニケーションを行っている。実際には変化していないという認識と、変化した「かのように」捉えることはどのようにして両立するのだろうか。本ワークショップは、仮想変化表現・使役表現の分析を通して、「かのように」性の広がりとお行きを見定める。そのうえで、認知言語学が重要視する捉え方 (construal) をコミュニケーションというより大きな文脈に位置づけ、「伝え方の意味論」の端緒を開く。

■ 第一発表：仮想変化表現の射程

Matsumoto (1996) は「部屋が丸くなっている」「角が {落ちている/欠けている/取れている}」「この家は歩道に {突き出ている/飛び出ている}」などの表現を挙げ、その状態が最初から成立している場合でも（「丸くなる」といった変化が実際には起こってなくても）テイル形が使用される例だとしている。このような表現は、まるで変化の結果であるかのように状態を描写する表現であると考えられており、「仮想変化表現」と呼ばれている。Matsumoto は、標準的な状態が変化した結果としてある状態が成立したと捉えることが、この種の表現の動機づけになっていると述べ、描写対象に何らかの点で意外性がある場合に仮想変化表現が用いられるとしている。Matsumoto は英語の仮想変化表現として結果状態を表す受身 (形容詞的受身) を挙げている (e.g. a square with a corner {rounded off/cut off})。仮想変化表現についてはまだ不明な点が多く、テイル形や形容詞的受身以外の表現の分析も進んでいない。本発表は、仮想変化表現の研究が進展するための足掛かりとなるべく、「仮想変化表現は意外性、逸脱性を表すものに限られるか」「仮想変化を表す日本語表現はテイル形以外にどのようなものがあるか」「仮想変化を表す英語表現は形容詞的受身以外にどのようなものがあるか」という3つの問いを取り上げ、問題の整理と考察すべき論点の提供を行いたい。

■ 第二発表：ギャップを埋めるデフォルト表現 (例文番号は松田個人の予稿集原稿に従う)

日本手話 (1) の形式は「背が縮む」だけでなく「背が低い」をも表す。つまり、属性を表すときにまるで変化が生じているかのように表現している。また、(2) の形式は「ドアを押し開ける」だけでなく「ドアを開ける」をも表す。つまり、ドアの開け方が指定されていないにもかかわらず、まるで押し開けたかのように表現している。本発表では、このような「かのように」性がなぜ生じるのか、「かのように」性がどう使用・解釈されるのかなどの問題を考察する。

身体を媒体とした形式は必然的に目に見えることになる。(1) が標準的な背丈との差分を通じて「背が低い」という意味も表すのはそのためである。また、身体を媒体とする日本手話では、(2) のように何らかの仕方で働きかけを含む形式が用いられることになるのが自然である。そのため、「ドアを開ける」のような働きかけを指定していない意味を専一に担う形式は生じづらくなり、押し開けたかのように描写することになる。なお、「ドアを開ける」を表す形式は常に (2) であるわけではない。話し手は、一般的な知識・その場の文脈といった様々な要素を参照し、デフォルトの表現を決めることになる。

■ 第三発表：非典型的な語彙的使役構文における「かのように」性

本発表は、日本語の語彙的使役構文の非典型的な用法がもつ「かのように」性が、他の発表で扱うものどのように異なるのかを探る。この構文の典型的な用法 (例、太郎は窓を開けた) の主語とは異なり、(1) 「ニクソンがハノイを爆撃した」、(2) 「私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった」のような用法の主語は動詞句が通常表す行為の主体であるとは言えない。それにもかかわらず、記述の対象となる事態に含まれる変化 (ハノイの破壊、家財道具の焼失) を主語が引き起こしたかのように表現するのはなぜなのであろうか。

仮想移動表現 (例、高速道路が京都まで走っている) や仮想変化表現 (例、部屋が丸くなっている) では、記述される事態において客観的な移動・変化は生じていないものの、ある種の事態を認識する際に辿る心的経路が、実際に生じる移動・変化を認識する場合と同じであるために、同じ言語形式 (「走る」「丸くなる」) が使用される。それに対して、(1)(2) のような用法では、話し手が記述される事態を (典型的な用法の場合と通底する) 因果連鎖を読み込む形で概念化していると考えられる。(1) ではハノイ爆撃に関わる軍の指揮系統の最上位の人物が、(2) では自分の家財道具が焼失することを防ぎえたかのように捉えられた空襲の被害者が、それぞれ因果連鎖の起点に位置づけられることによって、使役構文の主語として表現されているのである。

■ 第四発表：「かのように」の見えづらさから見えてくるもの

言語によるコミュニケーションは、話し手が提示した言語的・非言語的の手がかりを利用して聞き手が対象をカテゴリー化する過程として捉えることができる (Langacker 2000, Scott-Phillips 2015)。カテゴリー化は、対象を特定の相貌のもとに把握する行為であり、(対象は相貌に収まらない面を持つために、) コミュニケーションには必然的に「かのように」性が伴うことになる。しかしながら、「かのように」性は多くの場合に極めて捉えがたい程度にとどまっている。それは、発話によって提示された手がかりと、話し手が意図した対象との間で相互調整が行われ、ずれが縮小されるからである。

コミュニケーションにおける「かのように」性は、これまであまり注目されてこなかった。それは「捉え方の意味論」では、話し手の捉え方や聞き手の注意の操作が関心の中心であったためだと考えられる。言語表現の意味は、話し手・聞き手がコミュニケーションにおいて行っている行為の総体である。ここにはたとえば、話し手と聞き手の「見え」(における焦点化) の差異が存在する。このような全体像を捉える試みとして「伝え方の意味論」を提案したい。